

新型コロナウイルス緊急事態宣言下における子どもの余暇の過ごし方について

○井上 恵里、寺田 達也（（公財）社会教育協会ひの社会教育センター）

研究目的

新型コロナウイルス（以下コロナ）感染拡大により外出自粛が余儀なくされ、学校が休校となり、子どもたちの習い事も中止が相次いだことで、自宅で過ごす時間が突然に、それも多くなってきた。

普段子どもたちの姿が見えない公園や河川敷にも姿をよく見るようになり、外遊びや川遊び、生き物探しなど、直接的な体験活動についてはむしろ促進されているように感じられた。

国立青少年教育振興機構³⁾ ⁴⁾が行った調査では、子どもの頃に体験活動を行っている青少年ほど他者への思いやりや積極性などの自立的行動習慣が身につけていることや自己肯定感も高い傾向にあることが示されている。また、子どもの頃の体験が豊富であった大人ほどやる気や生きがいを持っている人が多いとされ、自然体験活動を含む直接体験を通して子どもたちのよりよい育ちが増幅されていくことがわかっている。

しかし、現在の子どもたちは学校に塾・習い事など毎日を忙しくする生活を強いられており¹⁾、子どもたちが「自由に過ごす時間」や直接体験を行う時間が減少していることがありそうだ。

本研究では休校期間前後の子どもたちをとりまく生活状況や問題点を分析し、「ゆとりの時間」を与えられたことにより、子どもたちの生活様式に変化が訪れ、長い間社会的課題になっていた「遊ぶ時間の増加」が「ゆとりの時間」によって実現できたのではないかを考察する。

研究の方法

休校期間前後の生活様式を尋ねる設問4件法²⁾ ⁵⁾で子どもたちの生活様式に変化があったのか、クロス集計や相関分析を用いて検討を行った。また、自由記述からコロナによって「得られたもの」「失ったもの」を調査。自由記述の集計・振り分けを行い、得られた回答をカテゴライズした。

対象は幼児～高校生の子どもがいる保護者（幼児 n = 87、小中学生 n = 354）で規模は全国調査とし、

回答にはGoogleフォームを用いてオンラインにて回答を依頼した。

結果

1. 強制的なゆとり時間の増加について

「休校で『得られたもの』『失ったもの』について教えてください。」という自由記述の設問からゆとりの時間が得られているか調査を行った。まず、「得られたもの」に関しては、回答項目の数を基準とした回答率で、69%が家族との関わり、8%が時間的ゆとりが得られたと回答している。子どもたちは学校が休校になり、保護者の勤務形態の設問からは、51%の人がテレワークなどが在宅勤務に切り替えており「家族との関わり」というゆとりを生み出したのではないかと考える。

また、得られたものの記述からは社会への参画のようなものはなく、どれも家庭の中での関わりや家においてできるものが上位にきていることが分かる。

一方で「失ったもの」については40%が友達との関わり、13%が学校生活と回答。外や普段なら社会に出ることによって得られるものを失ったと回答した。これまでは社会に向いていた活動が家の中で過ごす形態に変化し、従来の生活環境とは異なったことが見てとれる。

これら2つの自由記述の結果より、ゆとりの時間の増加が得られており、加えて、多くがそのゆとりの時間は家族で過ごしていることが分かった。

2. 外で遊ぶ時間の増加について

家の中などで過ごすことが多くなったゆとりの時間と、外で遊ぶ時間と関連性があるかどうかを検証した。質問項目ごとの相関分析の結果から以下のようなことが得られた。休校前に「外へ遊びに行かない」と回答した人の休校前に「自然へのふれあいに興味がない」と答えた人との項目に正の相関がみられた（ $r = .387, p < .001$ ）。しかし休校前に「外へ遊びに行かない」と回答した人の「休校中に自然へのふれあいに興味を示すようになった」との項目で

も負の相関がみられた ($r = -.225, p < .001$)。このことからコロナが感染拡大し、家族で過ごしたり、時間的なゆとりができたとしてもその興味が自然に向くという有意な結果は得られなかった。

この他にも生活形態とメディアとの関わり方を尋ねた項目では、遊びの中心はゲーム・メディアであることがわかった (表1)。

(表1) **、相関係数は 1% 水準で有意 (両側)		休校中： 動画をたくさん見た	休校中： テレビをたくさんみた
休校前： 外で安心して遊ぶ場所が減っている	相関係数	.211**	.144**
	有意確率 (両側)	0.000	0.007
	度数	348	349
休校前： 夜寝るのが遅い	相関係数	.184**	.138**
	有意確率 (両側)	0.001	0.010
	度数	348	349

また表2からは生活リズムの変化がなかった。1、2ヶ月程度の時間的なゆとりでは自然への興味への変化には繋がらなかったように思われる。

(表2) **、相関係数は 1% 水準で有意 (両側)。		休校前： 夜寝るのが遅い	休校中： テレビをたくさんみた	休校中： 規則正しい生活が送れるようになった	休校中： 自然とのふれあいに興味を示すようになった
休校前：宿題に追われている	相関係数	.219**	.138**	-.161**	0.024
	有意確率 (両側)	0.000	0.010	0.003	0.655
	度数	352	350	348	348

表3からは身体を動かすことと自然への興味には関わりが見受けられた。

(表3) **、相関係数は 1% 水準で有意 (両側)		休校前： 運動する時間が短い	休校中： 身体を意識的に動かすようになった
休校前： 自然とのふれあいに興味がない	相関係数	.363**	
	有意確率 (両側)	0.000	
	度数	350	
休校中： 自然とのふれあいに興味を示すようになった	相関係数		.464**
	有意確率 (両側)		0.000
	度数		348

まとめ

結果より、コロナの影響による子どもたちの遊びの変化においては、自宅に居る時間が増えたことで近所の自然に目を向けるような機会になるかと仮定したが、結局はメディアでの遊びになったことが本研究で明らかになった。

ゆえに今回のような緊急事態宣言下で子どもたちの学校は休校になり、時間的なゆとりができたとしても、時間があるだけでは、子どもたちが自然へ興味を寄せることには繋がらないことが分かった。

今後の展望

本研究中、「自粛期間中に気軽に遊べる場所がありましたか？」という設問に61%の人が「ない」と回答し、「お子さんが一緒に遊ぶ相手はいましたか？」という設問には36%の人が「いない」と回答した。さらに普段から外遊びをせず、コロナ禍においてもしないと回答した人の中で自粛期間中に気軽に遊べる場所がないと回答した人は86%にもものぼった。「外で遊ぶ」ためには、時間だけではなく、「空間」「仲間」などほかの条件も無いと実現しないのではないかと考える。

おわりに

1、2ヶ月程度のゆとり時間では、子どもたちの直接的な動機だけで自然への興味をもつ、という段階まではいかなかった。やはり時間以外の要因を検討するべきであると考えたい。私たち野外指導者は外遊びの重要性をととてもよく理解しており、子どもたちを自然の世界へ誘う工夫をしているだろう。しかし子どもたちの外遊びをさらに促進するためには、外遊びの環境設定や仲間づくりなどが必要であり、そこから生まれるリスクを熟知しているようなことも必要なようだ。これらを踏まえると自然体験指導者の力が今後より求められるようになっていくのではないかと考える。

引用文献

- 1) Benesse 教育研究開発センター「第1回子ども生活実態基本調査報告書」26-28 (2005)
- 2) シチズンホールディングス「「子どもの時間感覚」35年の推移」3-8 (2016)
- 3) 国立青少年教育振興機構「青少年の体験活動等と自立に関する実態調査」69-76、2010
- 4) 国立青少年教育振興機構「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」96-103
- 5) 村田光範「現在の子どもの生活実態とその対応について」(2001)